

のは言うまでもなく、また、個々の性格的傾向によってあらわれる日常の行動状態が学習態度にも同様にあらわれ影響を及ぼしている場合の多いことを見た。もちろん、周囲の環境、刺戟による影響の大なることも言うまでもない。学習態度についてみると、Aグループは努力する、まじめ、確実な学習。Bグループは持続性、積極性に欠け意欲に乏しい。Cグループは注意散漫、努力不足、意欲に欠ける。Dグループは落ち着きなし、学習にむらがある、などの点が多く見られる。したがって以上の調査から今後の保育に当ってわれわれが更に関心すべき事は、いかにひとりひとりを深く観察し導くかということである。不安定な状態にある幼児の場合、家庭とも密接に連絡して環境を整え情緒的に安定した状態に導くこと、どんな事にも努力する態度、やり通す意志というような生活態度を養うことなどが、ふだんの保育の中で十分考えられなければならないと思う。常に幼児の個人観察を十分にして多少の変化にも考慮を払うことの大切さを痛感する。

幼児のムシ歯が健康に

及ぼす為害について（第一報）

日本女子体育短期大学

深田 英朗

岩堀 久子

藤田 復生

近年小児の虫歯症が激増している現状は一般によく知られているのであるが、重症型の小児ムシハつまり Rampant caries が約一〇年前に比し一〇倍の高率を示し、更にこれらのムシバが小児たちの

健康に案外大きな為害を与えている点は、今日あまり知られていないかと思う。虫窩が一たび根管に交通せるものは、種々なる細菌の体腔への感染門戸として、その意義はきわめて大きいのである。このような観点より私どもは一二二名の学童、八四名の女子短大生および六二九名の幼稚園児を対象として、小児ムシバの為害作用につき調査した。今回報告するものは本研究の一部である。

研究成績 ①学童の調査ではムシバの保有数が多い子どもほど顎下淋巴腺の腫脹している者が多かった。幼児を対象としたものでは、重いムシバを持っている者ほど淋巴腺の腫脹している率が高かった。例えばC₃のムシバを有しているグループでは淋巴腺の腫脹している者が八一・一二%、C₁のムシバだけを持っているグループでは三六・二一%であった。なおムシバ皆無のグループでは一七・一四%でしかなかった。

② 乳歯のムシバがひどくなった場合根の先に炎症を起こし、その結果永久歯の発育不全を起こすかを学童・短大生二〇六五人につき調査した結果、五・八一%の発現率があった。

③ この研究でもムシバのない者の方が、ムシハのある者に比べはるかにかみ合わせがよいという結果が出た。しかも、重症ムシバをもつ者ほどかみ合わせが悪かった。ムシバの全くない者では正常なかみ合わせをしているものが七七・五%であったが、C₁C₂のムシバをもったグループでは正常なものは五四・五%であった。ところが、C₁C₃のムシバ保有者を調査してみると正常なものは二二・四%しかなかったのである。

④ ムシバのために咀嚼能力を失った発育期の小児たちはしからざる小児たちに比べ体重の自然増加の上に影響があるかを調べた。重症なムシバを有している小児八三名をA、B、二群に分ち、A群

四三名は完全治療をほどこし、咀嚼能力を回復すべく義歯まで装着した。またB群四〇名はそのままの状態で放置しておきその後四か月間の体重増加の状態を観察した。もちろん八三名の幼児たちの中には実験開始時平均体重より劣る者が多かった。実験開始後四か月目に両群の体重増加をしらべてみると、A群は平均一・七六kgの増加を示し、B群は〇・四八kgの増加をきたしていた。

日本人小児の体位向上に 関する統計的一考察

日本女子大学 長 竹 正 春
加 藤 翠

目的 日本人の体位は第二次大戦による生活環境低下の一時期をのぞいて、年々向上してきているが、それが経時的性別ならびに年令的に、どのような傾向をもつて向上してきているかについて、文部省の学生、生徒、児童の發育統計を中心として統計的に考察を試みた。

研究方法 明治年間からの標準値が出ているので、主として文部省の發育年次統計について、また厚生省国民栄養調査成績などについて統計的吟味をおこなった。代表年次として、明治三三年（最も統計上古いもの）大正二年、昭和二年、十一年、二十三年、二十八年、三一年をえらんだ。身長・体重・胸囲について、各年次の六才より二十四才までの發育曲線の違いについて検討した。各年令の身体計測値が、明治年間より今日までどのような向上を示したかを検討した。

昭和三十一年の各年令の計測値を一〇〇として、それ以前の代表年次の各年令の計測値の%を求め検討した。

昭和三十一年の各年令の計測値とそれ以前の代表年次の各年令の計

測値の差について、Standard Score を求めて検討した。

その他給食状況、疾病率など、体格の向上を裏付けられると思われる事項について検討を加えた。

調査結果の主なるもの

1 日本人小児の体位は年々向上の傾向にあるが、この傾向は身長が一番顕著に見られ、体重、胸囲の順につづく。女子は男子より向上の度が著明のようである。体位向上は青年前期に顕著で、女子の方が男子よりこの時期が早いようである。

2 戦争の影響による体位の低下は發育期のどの年令にも見られるが、一二—一四才の青年前期にこの傾向が目立ち、女子より男子に影響が大であったようである。また戦争の影響は、体重に一番はつきりあらわれており、身長、胸囲の順であった。

小児の栄養方法と

知能発達に関する一考察（第二報）

——地方幼児および都会労働者階級幼児を対象とする——

日本女子大学 武 藤 静 子

加 藤 翠
高 神 弘 子

本研究は、第十一回大会において先に発表したものの追補であつて、昨年度対象児が都会中流以上の家庭に偏した為、本年は炭坑五〇名、漁村五〇名、農村五〇名、および都会労働者階級五〇名の計二〇〇名の幼児を対象として、乳幼児時代にとられた栄養方法と、知能発達について調べたものである。調査方法は、田中びねー個別知